

大腸Ⅱcが幻から実在する癌へと認識が変わった1980年代後半から、約35年が経とうとしている。今回の執筆者は、ほとんどが当時を知り、大腸Ⅱc研究会では白熱した議論を展開されていた先生ばかりであり、近年の学会、研究会などでⅡcの注目度が低くなっていることにさまざまな視点で危機感を抱いているようである。

Ⅱcへの注目度が低くなった要因には、大腸Ⅱcがまれな病変であることや、発見したⅡcも癌ではなく陥凹型腺腫という異型度の低い病変ばかりであり、当初の“Ⅱc=*de novo*癌”の認識からトーンダウンしていることなどを挙げている。大腸Ⅱcの頻度は、田村、石田、寺井らが示しているように現状でも1%以下であり、まれな病変といわざるをえない。また、Ⅱc(粘膜内病変)発見当初は陥凹という特殊な形態から癌と診断する傾向にあったが、時代的な変遷とともに形態にかかわらず、味岡、河内、八尾らは病理組織診断上、良性の陥凹型腺腫と診断せざるをえない組織異型度の病変もあるとしている。しかし、八尾は、隆起型と陥凹型ともに同様の異型度をもつ腺腫でありながらも、陥凹型腺腫では同じ組織型であっても細胞の性格が異なることを示しており、陥凹型腫瘍の分子生物学的特徴を解明していくことの必要性を強調している。工藤らも、Ⅱcはadenoma-car-

cinoma sequenceとは全く異なる癌化システムをもつことや、陥凹型のT1癌では上皮間葉移行や血管新生といった浸潤・増殖に関わる遺伝子セットが高発現していたということを明らかにしている。大腸Ⅱcの発見については、佐野らはNBI観察が有用であること、工藤ら、三澤らは人工知能(AI)技術によるⅡcの発見率向上に期待している。また、山野は興味ある検討として、検査施行医による検査精度、経験値、センスのレベルによってⅡcの発見率に違いがあり、観察手法の指導や検討会などで「センスを磨く」教育指導の大切さを述べている。

本特集を通していえることは、Ⅱcは粘膜に留まる段階では陥凹型腺腫としか診断できない異型度があるにもかかわらず、5~10mmの小さな段階で粘膜下層に浸潤する、そのギャップを分子生物学的に解明していくことや、AIや画像強調などからⅡcの発見率向上を目指すことなど、さまざまなアプローチからⅡcの病態を究明していくことが求められる。今後、大腸Ⅱcの病態解明に向けて若手医師への伝承も必要である。そのためには大腸Ⅱc研究会の草創期を知るメンバーがⅡcの病態解明への意欲を持ち続け、研究を継続していくことは大切なことである。

藤井隆広(藤井隆広クリニック)

INTESTINE

Vol.25 No.4

©2021年12月20日発行

定価 3,520 円(本体 3,200 円 + 税 10%)

●年間予約購読は前金にて書店あるいは弊社宛お申し込み下さい。ただし、年間購読料は年度により異なりますので、書店または弊社までお問い合わせ下さい。

・ Published by Nihon Medical Center, Inc.

© 2021, Printed in Japan

・ 本誌に掲載された著作物の複製権・翻訳権・上映権・譲渡権・公衆送信権(送信可能化権を含む)は(株)日本メディカルセンターが保有します。

・ JCOPY 〈出版者著作権管理機構 委託出版物〉

本誌のコピーやスキャン等による無断複製は著作権法上での例外を除き、禁じられています。複製される場合は、そのつど事前に出版者著作権管理機構(☎ 03-5244-5088, FAX 03-5244-5089, e-mail: info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。

編集
発行人
発行所

『INTESTINE』編集委員会

増永 和也

株式会社 日本メディカルセンター

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-64(協和ビル)

営業直通電話 (03) 3291-3901 (代) FAX (03) 3291-3904

e-mail info@nmckk.co.jp

編集直通電話 (03) 3291-3971 (代) FAX (03) 3291-3377

e-mail intestine@nmckk.co.jp

印刷所

シナノ印刷株式会社

広告申込所/株式会社 文栄社 〒113-0033 東京都文京区本郷3-26-1 電話 (03) 3814-8541